

## 「教科書のフランス語時制とアスペクトの関係性」

小澤 南海(西南学院大学大学院 博士後期課程)

本発表の目的は、フランスで出版された教科書と日本で出版された教科書に現れる複合過去形・半過去形を、アスペクトの観点から分析することにある。そして得られた結果から、フランス語教育へ還元できる点を検討する。

考察の軸は、文法アスペクトと語彙アスペクトである。文法アスペクトは、ある状況の展開や結果についての、動詞の形態素が示す見方のことを指し、語彙アスペクトは、動詞や動詞句が示す見方のことを指す(Olsen 1997: 3)。本発表では、Smith(1997)に従って文法アスペクトを完了と非完了の二種類に区別し、Vendler(1967)に基づいて語彙アスペクトを状態・活動・達成・瞬間の四種類に区別する。

テンス・アスペクトの習得には、文法アスペクトと語彙アスペクトが影響するという「アスペクト仮説」が提唱されている(Andersen & Shirai 1994: 133)。「アスペクト仮説」をインプットの頻度で説明しようとするものが *Distributional Bias Hypothesis* で、学習者はインプットで発見した特定の形を、絶対的な特徴として認識するというものである(Andersen 1990: 58, Andersen & Shirai 1994: 137-138)。即ち、特定の文法アスペクトと語彙アスペクトの組み合わせに触れる機会が多ければ多いほど、それを認識し、習得しやすくなる。

本発表では、アスペクト仮説とそれを説明する *Distributional Bias Hypothesis* に基づいて、学習者のインプットに直結する教科書の調査を行う。「アスペクト仮説」によると、習得がされにくいという「複合過去形かつ状態動詞」「複合過去形かつ活動動詞」「半過去形かつ達成動詞」「半過去形かつ瞬間動詞」の四種類に調査対象を限る。教科書に「アスペクト仮説」との関係性が見出せるのか、そして、教科書では複合過去形と半過去形がどのように提示されているのかについて、フランスで出版された教科書と日本で出版された教科書を比較しながら分析を行う。